

## 第6章 園芸療法と関連領域の現状と可能性

人と自然社 菅 由美子

### 1 プロローグ

「私は大きいこと、偉大なこと、大きな機関、大きな成功と手を切ろう。そして、たくさんの小さい根のように、あるいは毛細毛管からしみ出る水のように、世界のすき間にひそやかに広がっていて時間さえあれば、もっとも頑丈な人間の誇りの権化を粉碎してしまう、人から人へ働く微細で眼に見えない分子のような人の間の力の味方をしよう。」

ウィリアム・ジェームス

もしも正しいねがいに燃えて  
じぶんとひとつ万象といっしょに  
まことの福祉にいたろうとする

宮澤 賢治

<母なる自然>は、わたしに自分の卑小さを感じさせ、どんな打撃にも、敢然と立ち向かう覚悟をさせてくれるのである。

アンネ・フランク

人間が意味深く幸せに生きようとする力と、<母なる自然>、農業、園芸、自然の力を結びつけようとした者達が西洋、東洋を問わず存在し、人間と自然との相互の創造的営みを希求した。

宮澤賢治は、農村に科学と芸術を生かした新興文化を希求し、農民芸術概論綱要の稿を起こした。彼が生きた地の近く岩手県東和町に今、園芸療法が生まれている。

アンネ・フランクは人間と自然の尊厳を破壊する戦争の中で、母なる自然に連なり、平和を希求した。彼女の生きたオランダは今園芸立国であり、最も質の高い福祉先進国でもある。

百年ほど前に、神経症の治療に農作業を重視した、森田正馬の故郷の高知県で、行政枠を超えた園芸療法の研究協議会が起きた。

ある人が、涙や汗をこぼしながら希求したことは時空を超えて汗のこぼした地に実現していると思えて仕方ない。

## 2 園芸療法に関する主な書籍と第一人者紹介

日本における園芸療法の実践、行政・団体の動向は『日本における園芸療法の実際』(グリーン情報編集・発行)に詳細に紹介されている。この本は、グリーン情報がニュートラルな第三者である出版・情報提供者であることを生かして、公平な立場で、編集したものである。そのため、園芸療法をどう定義づけるか、また理念についてかなり意見を異にする実践や動きが所属団体等に関係なく一冊にまとめられている。ここでは、園芸療法の萌芽ともいべき、真摯な試みが実践する者達自身の言葉によって述べられている。巻頭で九州大学農学部の松尾英輔教授が解説している。松尾教授は、農学が生産園芸のみにとらわれていた時代から園芸の社会的役割について研究された。穏やかで謙虚なお人柄の松尾教授が、この分野で果たされた貢献は大きく、氏を中心に「人間植物関係学会」が設立され、地道な研究活動が進められている。

医療関係の出版では、医歯薬出版より『別冊総合ケア・園芸リハビリテーション』が発刊されている。京都大学医療技術短期大学医学博士・山根寛教授、諏訪中央病院管理者・鎌田貫医師、西南女学院大学保健福祉学科部・根ヶ山俊介教授をはじめとする著者が、実践現場を包括的視点で述べ、実践例も数多く紹介されている。

又、こうした動きは、二十年も前から園芸療法を志しアメリカで初めて園芸療法を学び、日本に持ち帰り、実践し献身的な啓蒙活動を継続してきた澤田みどりさんの、実践者のネットワークである園芸療法研修会が母体となっており、澤田さんの地道な努力なしでは日本の園芸療法はあり得なかつたであろう。

また、『園芸療法入門』藤原茂著が夢の湖舎出版部より五月に発刊される。藤原茂氏は、日本作業療法協会常務理事を十四年務めた。また、厚生省高齢福祉課、維持期リハビリテーション検討委員等として高齢者の地域リハビリテーションを引っ張ってきた第一人者であり、明治維新に活躍した長州の志士の風貌を持ち、信望の厚い人間である。

藤原氏は日本園芸療法協議会副代表を務め、藤原氏を大会長として、第一回日本園芸療法研究会 in 山口が二〇〇三年五月三十一日・六月一日が開かれ、アメリカ園芸療法協会前会長マリアガバルド先生と動物介在療法、音楽療法などの第一人者が勢揃いする。この会では各療法の効果などが具体的に研究される。

園芸療法に関する本は、障害者関係の本の専門店「スペース 96」(TEL.03-399-0368)と「夢の湖舎出版部」(TEL.083-995-2820)が今まで出版されたもののほとんどを扱っている。関連分野の書籍もそろえており、この分野の情報源である。

園芸療法の定義・理論・実践方法などについては、こうした書籍を参考にしていただくとして本稿では園芸療法の動きの中で生まれている可能性に注目しながら特に萌芽ともいえる小さいが地道に歩み続けている、現場に直結した実践現場の現状を解説する。

## 3 園芸療法の源流

園芸療法を開拓し又、支えようとする者達の多くが共通に気づきはじめていることがある。全く異なる土地で、異なる分野に関わっているにも関わらず大切なこととして気付く

ことが驚くほど似ているのだ。どうも原点に戻り考えると同じことに行き着くようなのだ。

### (1) 自然の陶冶 一自然の持つ治癒力一（人と自然と動物と）

「自然の中で生活するって、すばらしいことですよ。私ね、日本人の人たちがみんなこういった自然の中で生活することができたら、きっと今のような先端医療のもめ事なんて、一つも起こらず、それどころか自然環境問題も血生臭い事件は目に見えて減り、日本という国民が変わっていくと思いますよ。（中略）もっと古来、自然から学んできた知恵を、日本人は誇りに思い、それを自分達文化として継承していくべきなんじゃないでしょうかね。（中略）自然と自分が一体であることが直感できたら、宇宙に生き、自分の中に宇宙があることを実感できたら、人生ってまったく違つてものに見えてくるものですよ。（中略）二十一世紀の医療は大きく変わりますよ。」

（澤田祐介「蘇る医神アスクレピオスの物語」医歯薬出版）

#### 1) 長野県東部町「福祉の森」構想

澤田氏の言葉は単なるセンチメンタルな自然回帰へのあこがれではない。救急医療の最先端を行く者として近代医療の限界を見極め、自ら東海大学医学部の教授職を辞めた。そして現在は、長野県の小さな町にある小県郡東部町医療福祉センター長とし保健・福祉・医療を包括した地域医療「福祉の森構想」を実現している。「福祉の森構想」は、豊かな緑と公園の中に病院、福祉施設、高校、町立運動公園等が点在しており連携を始めている。医療、福祉、教育、健康づくりが統合されるエリヤとして、長野県の豊かな緑が機能し始めているのだ。こうしたエリヤは、効率至上主義の中で土地も人間のつながりも分断されている、都市では実現できぬことであり、これから農村の可能性をさし示している。

#### 2) 諏訪中央病院

長野県諏訪中央病院は、先駆的な地域医療で知られており、病院らしくない病院をつくりっている。屋上デッキは床も手すりも木である。患者は、家族や友人知人たちと、ここでやすらぐ時間をすごす。屋上デッキで気持ちよさそうに床に寝そべっている患者がいた。

車椅子で出てくる患者もいる。自然林のなかに建てられたぼくらの病院では、デッキに出るだけで森林浴になる。緩和ケア病棟では、すべての病室からデッキに出られるように作られており、風景も仲間に引き入れて、癒しの手伝いをしてもらっている。

ウッドデッキにはホスピスボランティアやグリーンボランティアが手入れしてくれている鉢植えの花が咲いている。ここからは八ヶ岳の全貌が美しい。

ボランティアの人々が、病院をぐるっと取り囲むように花壇を作ってくれた。名も覚えきれないほどのハーブも植えられている。患者さんたちは自由に花を摘み、病室に飾る。ハーブはパンにはさんで食べる。サラダをつくる。

地域リハビリテーション・センターの前の庭には、患者さん自身が花や野菜を植える。日本のアクティブな病院では大変珍しい園芸療法に取り組んでいる。そのために庭仕事の道具もそろえられている。

諏訪中央病院管理者 鎌田 實

『がんばらない』 集英社

諏訪中央病院の庭は住民のボランティアをはじめとして病院関係者（作業療法士、理学医療士、長期療養病棟看護婦、老健施設長、病院事務）ハーブ専門家、造園設計、有機農業実践家、身体障害をもつ大工、園芸療法士、茅野市建設課のメンバーが、月一回集まり、庭の設計と施工が話し合われ、住民ボランティアの力を得て、施工や庭づくりが進められた。とりわけハーブ専門家の萩尾エリ子さんと病院用務員の丸山明さんの貢献が大きい。

## (2) 傷ついた癒し手

受け身にならざるを得ないシチュエーションの中において感得する叡知といいますか力といいますか、そういうものの積極性というものが、ある種、現代文明のバックグラウンドの中ではものすごく求められているような気がしますね。

龍村 仁「地球交響曲第三番」パンフレット

四つ葉のクローバーはクローバーの社会の中では、障害クローバー。だから早穂理は四つ葉のクローバーとおんなんじ。皆に幸せを運んでくれる天使だった。

塩沢 みどり 『早穂理。ひとしづくの愛』原書房

目を上げて畠を見ると、はや色ついて刈り入れを待っています。もはや障害のある人もない人も関係なく、今共に収穫の喜びに参加する時です。目の前には、命と命が響きあう世界が広がっています。

森 昇「修光学園グループパンフレット」より

たしかに形のあるものはなにひとつ持っていない。けれども、数多くの目に見えるものを支えている目に見えないもっとも大切なものを長い苦しみと絶望の果てから与えられ、それが心の中で息づいているような気がする。

星野 富弘

『愛、深き淵より』立風書房

星野 富弘さんは不慮の事故で首の骨を骨折、全身麻痺の障害を持った。筆を口にくわえて、花の絵と詩を描いており、その絵と詩は多くの人に勇気を与えている。

自然はいつも強さの裏に脆さを秘めています。脆さの中で私たちは生きているということ、言いかえれば、ある限界の中で人間は生かされているのだということをともすると忘れるがちのような気がします。

星野 道夫

「旅をする木」文芸春秋

「傷ついた癒し手」wounded healer という言葉がある。これは病や障害、社会的困難

のために、一時は生きる望みさえも失うほどの苦しみ・痛み・悲しみを味わった人が、自らの生を生き抜くべく勇気をもち続け、ついには他の苦しみをかかえている人をなぐさめ励まし育てるようになった人のことを指す。

障害や病を持つ人々が、実は精神的に病み、閉塞した日本の社会を癒す、そういう時代が今ここまで来ているという予感を多くの園芸療法の実践者達は実感している。困難が多いにも関わらず、園芸療法の実践にとり組む者達の多くは、自分がかえって癒され幸せだと感じている。それは、障害や病を持つ人々の、龍村の言う観知や力に触れ、又植物や自然の積極性に触れることで、人間の心の深い層に流れる静かではあるが、生命を根幹から支える“生きる力”を、経験するからだと思う。

### 水輪

長野県飯綱高原の水輪ではまさに重い脳障害のため話すことも動くことも何もできない障害をもつ人に人々が癒されるという現実が起こっている。早穂理さんという重い脳障害をもつ娘さんと高原の静かな木造の家で生きている夫婦を中心に、ほんものの小さなコミュニティができている。

一時は、娘の将来を憂い社会福祉制度の改善のため奔走した時期もあったが、空しさと限界を感じ野垂れ死にを覚悟の上、飯綱高原へ移住し、自ら畑を耕し、枕木を運んで道を作った。この早穂理さんと塩沢夫妻を訪ねて次第に人が集まるようになり水輪ができる。早穂理さんと生きるための経験が今は他の人も癒しているのだ。不思議と水輪に訪れる人々はほっとし、勇気を得て帰るのだ。塩沢さんに寄稿していただいた。

「21世紀のテーマは地球環境、とりわけ「水」に関するものが大きなウエイトを占めていると言えるでしょう。生物にとっては、水は命の原点とも言えます。文明の進化とともに地球環境が急速に悪化の一途をたどっている今日にあって、全てが物質を中心に回ってきた20世紀の効率化社会の意識から共生、共存の地球社会へと進化させ、循環型の生産様式に転換していくことが全ての分野の課題であると言えます。

水輪はこれらの課題の根元に「人類の意識の進化」を置き、ホリスティックなアプローチを試みています。

1993年に開設されたホリスティックスペース「水輪」は医療、文化、教育、福祉、芸術、農業、経済、宗教などあらゆる分野から人類の意識の進化に向けた実践活動を行っています。今年度は医療の分野では帯津良一先生の水輪養生塾、西口のり子先生のホメオパシー講座をシリーズで開催、芳村思風先生の感性論哲学講座、神渡良平先生の内觀合宿、宮島基行先生の自己を深める講座、スザン・オズボーンさんのボイスセミナー、ウォン・ウィンツアンさんのピアノワークショップ、中健次郎先生の氣功、などが行われ、また心を高める企業の社員研修などが開催されています。水輪で開催されるこれらの活動の原点は今年28才になる重い脳障害をもつ娘との生活の中で全ての苦悩はその意識によることであるとの気づきが出発点となりました。

医療は教育にも、経済にも、また心の有り様にも大きく関係します。1つのことは万の

ことにも広がり、万のこととも1つのことに帰結するということに気づかされてきました。様々な分野からのアプローチはまたそれぞれの分野同士が交差し、より深い意識の進化を可能にしていきます。園芸療法はセラピーと農業をまさしくホリスティックに捉えたものとして近年評価されてきていますが、現在水輪の東側に広がる14,000坪の農地の取得と自然農に加えた園芸療法としてのセラピーの展開が今後の水輪の活動目標となっています。

一方、水輪では「ワーク&スタディー」というシステムがあり日々のワーク（仕事）を通して自己を深めていく、という活動です。人生の中でつまずいたり、悩んだり、苦しんだりしている自分をワークという日々の実践をとおして復活させていくというもので園芸療法にも大いに関係のある活動です。この10年で100人以上の人達が参加してきました。現在は8名がこれに参加しています。このワークの中でも大自然とのかかわり、土との関わりはより深い癒しと人生の復活をなさしめる貴重なものと核心しています。」

水輪 塩沢研一

### (3) 心理的コミュニティ感の場をつくり出す園芸療法

老いも若きも、どんな地域に住んでいようと、教育の程度が高くても低くとも政治的左翼も右翼も中道も専門家もそうでないものも富ある者も貧しい者も、どのように分類しようとも、それぞれの集団の中で、かなり大勢の人達が、孤独を感じ望まれず、必要とされていないと感じている。彼らは、あらゆる種類の『ギブアンドテイク』の活動と人と人との関係に関わりを持っているが、自分達の私的な世界の境界と浸透性は、変えられないことにいつも気づいている。

ディヴィット・B・シュウォルツ『川を渡る』

慶應義塾大学出版会

サラソンが唱えた「心理的コミュニティ感」とは「容易に参加できる相互支援的関係のネットワークに、自分が帰属しているという感覚」で「この関係に頼ることができる結果、継続する孤独を体験せずにすむ」のです。

ある意味で園芸療法の実践現場は、閉鎖性や息苦しさを突き破って生まれ、心理的コミュニティの場を形づくっているように思える。

今、園芸療法が世に問い、また提案していることは、百の生き物を育てる百姓の日々の生活と、お金にならないけれど、嘗々と女性達のしてきた雑多なことがらが、実は命を支える必要不可欠なことであり、これから心理的コミュニティづくりの基本となるのではないかということなのだ。

#### 恵光園

福岡県豊前市の恵光園(知的障害総合施設)は、「まき場の生活プログラム」として園芸療法・乗馬療法(ヤギ・羊・犬もいる)、音楽療法を総合的に取り入れ、有機農業を中心とする優れた実践をつくりあげている。又環境保全の試みを広大な里山で試みている。ここで重度の知的障害の治療教育に人生をかけてきた尾家誠子さんに寄稿いただいた。

<何故「園芸の場」が障害者(知的)にとって療育的に有効であるかの理由>。

① 障害児者(知的)のための園芸にはハード面の配慮、道具の開発といった物理的な配慮もありますが、「園芸の場」がどのように療育的に大切であるかを理解する必要があります。まず第一に生き物の持つ幅の広さが療法としての幅の広さを意味しています。即ち、どのような取り組みもできるという間口の広さがあり、しかも治療を受けている人の意志にもかかわらず、治療者の意図を介入していけるところに、療法としての有効性があります。

② 治療的場面にとっての条件は何よりも安全であり、暖かく囲まれた雰囲気が必要であり、治療される人と治療する人の間にストレスを感じさせないような媒介が必要です。そして、その媒介には静と動を必要とします。

触覚刺激への過敏により、行動上の問題(パニックや対人関係の苦手など)があつたり、心を閉ざしていたり、グループ活動が出来なかつたりする場合に、園芸活動は静と動を上手に提供できる「場」の条件があります。

③ また「園芸の場」が治療に適しているのは、治療としての仕事を個別に構造化できるため、自尊心を傷つけないばかりでなく、自尊心を育て「生きる力」をつけていきます。知的障害児者にとっての園芸は植物と人間との関係だけでなく、「園芸の場」が療育的な良い環境であるという見方が必要あります。

④ 「園芸の場」は、障害によって、年齢によって異なった場を必要とします。福祉的園芸を考える時、できあがったおしきせの花壇ではなく、いじり、壊し、作る場としての要素があり、中庭のようなガーデンが街中にあったらと思います。

#### 4 実践総合科学・芸術としての研究と人材育成

##### (1) 地方自治体の職員等の提案により事業化した調査・研究、その後の展開

###### 1) 岩手県東和町

まっさきに地方自治体として園芸療法に取り組んだのが、岩手県東和町であり、町職員吉田みなこさんが一念奮起して園芸療法の長期研修に渡米した。翌年には、イギリス、アメリカの園芸療法の専門家を招きシンポジウムを開いた。その際、ボディル・アナヤ先生(高等園芸療法士)が「東和町が本気で園芸療法をとり組まれるのであれば、半年日本に来て東和町のお年寄りと一緒に園芸療法を実際にしましょう」と提案し、町は即答で「ではやりましょう。お願いします。」と答えた。ボディル先生は6ヶ月の間、東和町の民家に滞在して華の苑(老健)の高齢者と実際に園芸療法を行い、若い人々を育てた。

当時66才だったボディル先生の話せる日本語は「おはよう」「さよなら」「ありがとう」程度だった。にも関わらず東和町のお年寄りと手ぶりと暖かい心のこもったコミュニケーションで、仲良く毎日園芸療法をやってのけてしまった。

園芸療法の基本は理屈や技術よりもハートなのだということを、ボディル先生は身をもって示し、温室ではいつもボディル先生とお年寄りの笑い声がたえなかった。

(ちなみに笑いはガンに対するナチュラルキラー細胞を増やし、免疫力を高める。)

人間にとって大切なことはアメリカだろうが岩手県の過疎の町であろうが関係ないの

だということをボディル先生と東和町の人々は確認したのだ。小さな東北の町がダイレクトに国際的なつながりを持ったのだ。しかも、ずっと農民として生きてまたごく普通のおじいさん、おばあさんたちが…。Act Locally Think Globally とはこういうことをいうのだろう。ボディル・アナヤ先生はその後、四回来日された。又、アメリカ病院・施設で三ヶ月以上の長期アメリカ研修する日本人園芸療法士の卵達 20 名を助け育ててきた。

### みどりのゆびー グロッセ 世津子さん

この東和町の国際的つながりに大きく寄与したのがグロッセ世津子さんである。ベルギー出身のペイザジスト（景観設計家）を夫に持ち、東和町に居を移して、町立西洋風モデルガーデン（園芸療法ガーデン）をつくった。日本で初めての園芸療法ガーデンである。ガーデンは町立の温泉に併設されており、町民の憩いの場になっている。この町立のガーデンは「花っこクラブ」として、知的障害、精神障害、身体障害、慢性疾患のある人々が、セラピーやレクリエーションの場として、あるいは就労の場として、ガーデンの持続、管理の一端になっている。グロッセ世津子さんにその後の展開を寄稿していただいた。

ひとりを受け入れることから始まった「花っこクラブ」は、口コミでひとり増えふたり増え、6年を経た現在では、メンバーは16人になっています。まほろば福祉作業所から通ってくる大部分の人達に混じって、自宅から通ってくる人もいます。ひとりひとりが育てたいと選ぶ花や野菜を、畑や樽や麻袋などで育て、収穫し、調理する、持ち帰る、販売するなど、自分で決めた利用方法で楽しむというプログラムをベースにして、花っこクラブのプランターをはじめガーデンの花壇の植え付け、草取りや花がらみなどの管理、収穫物や自然の素材を利用したクラフトやアート活動を中心に行ってています。メンバーのニーズに応じて、リハビリ、あるいはレクリエーション、あるいは就労プログラムをデザインしています。異なるタイプのプログラムに共通するコンセプトは、「ひとりひとりが、『その人なりの花を咲かせるための情報を持って生まれてきたひとつつの種』という視点から、障害や病気というその人の一部でしかないレッテルの向こうにある『まだ見えざるもの』『秘められた可能性』を引き出せるような、その人の種の情報開花=表現方法を見つけることができるような環境設定を、『植物を育てる、収穫する、利用する』というプロセスを通して実現しよう」というものです。ガーデンという恵みに満ちた環境の中で育まれる土と植物と人のコラボレーションです。

このガーデンは、県立病院や介護老人保健施設に隣接していることから、病院の患者さんや家族、老健の利用者さんが日常的に散歩にこられます。花っこクラブを訪ねて県内外から色々な施設の人達やご家族もよく遊びに来てくれます。ガーデンに併設する温泉にいらっしゃるお年寄りがひんぱんに立ち寄られて、メンバーに励ましの声をかけてくれます。こんな風に、ガーデンは様々な個性を持った人達の出会いと交流の舞台でもあります。

今年の4月から、週3日の就労プログラムもスタートしました。花っこクラブのメンバー3人が、私の会社みどりのゆびの有給スタッフとして、ガーデンの維持管理を一層手伝ってくれています。就労プログラムのメンバーのひとりは、小学校6年から中学3年まで養護学級から花っこクラブ通って来ていた青年で、今年養護高等学校を卒業して東和町へ

帰って来ました。一般企業への就職が難しい彼ですが、「稼ぐこと」を目標に、気合いを入れて働いています。更に、やはり今年の4月から、ガーデン内の温室の運営もすることになったので、植物の販売のみならず地域に開かれた場として休憩スペースやイベントスペースもある空間として温室の再整備が終わったところです。ほとんど廃材利用でつくり、花っこクラブのメンバーも、ペンキ塗りなどで活躍しました。まほろば福祉作業所も、毎週木曜日にここでコーヒーを出したり、物品の販売をしています。

## 2) 高知県「園芸セラピーバックアップ事業」

平成九年度、橋本大二郎知事が「おとしだま」をあげようと話した。三億円の特別枠を設けて、職員からの事業提案を直接受け付け、知事が直接査定して事業化を決定するというものである。この事業は、高知県農林水産部園芸推進課が担当し、園芸セラピー研究協議会が発足し、園芸療法と関連のありそうな十七名が共同で調査・研究を行った。協議会はタテ割り行政の枠を超えて、福祉施設長、作業療法士、農業高校教諭、造園設計士、福祉事務所、児童相談所、農業改良普及所、障害福祉課等と通常では話をするなど考えられない異分野の関係省がとまどいながら、調査・研究が進められ、平成十年度からは障害福祉課が所管する南海学園(知的障害児施設)での取り組みへと展開した。

南海学園でのワイルドフラーによるフラワーフェスティバルには橋本知事と奥様が障害児と保育園にまじって草むしりに汗を流してくれた。障害児が知事に「よう来たな、まちよったぜよ。」と声をかけた。母なる大地の上では肩書きや地位は関係ないのだ。また、協議会の構成メンバーを中心に、高知県園芸療法研究会が発足され、精神病院「精華園」の庭に関わるなど、高知独自の活動が展開されている。

その当時、高知県健康福祉部副部長だった大崎博澄氏は、現在教育長をしておられ、「山の中の小さな田畠を守ることが、この国の将来の環境や食料を守る道だ」という信念を持っており、自ら、山の畠で汗している。

(大崎博澄『子どもという希望』より抜粋)

## 農的生きがい

高知女子大学・中山間地域総合研究プロジェクトの「中山間地域研究年報」を拝読した。過疎化、高齢化の進む高知の山村の典型、池川町をフィールドに、生活科学、社会福祉など各分野の研究成果が収められている。地域貢献、現場重視という社会福祉学部の研究姿勢を示す労作である。

玉里恵美子先生『高齢者の多様な家族生活と「農的生きがい」』に触発された。論旨は、高齢者の家族の形と生活の実際の詳細な聞き取りをベースに、中山間地域に暮らす高齢者の生きがいは、何か新しい試みをすることよりも、体力の続く限り手慣れた農作業を続けることにあるはしないか。こうした生産活動を経済活動につなげた池川町の436心市や土佐自然工場の成功例を引きながら、農的生きがいを基盤にした生涯現役社会の可能性は中山間地域にこそ、と指摘する。

共感を覚える。農的生きがい、という言葉が新鮮で象徴的だ。それは高齢者だけではなく、若い世代にも共通する農山村再生のキーワードだと思う。この国の将来を左右するの

は環境と食料であり、中山間地域の一次産業がそのカギを握る。経済発展と環境破壊、生産性と人間性の背反、地域コミュニティの崩壊、二十世紀の文明は今八方ふさがりだが、山村の高齢者のかなたに希望が見える。

### 土の中の生き物達

中山間地域の小さな田畠に、産業として成り立つ農業を根付かせるためにはどうしたらよいかを、ずっと考えている。安全で美味しいという食の原点に立ち返ること、環境と折り合いをつけること、この二つがキーワードだと思う。欧米諸国で大きな付加価値を持つオーガニック(有機無農薬)農産物が急速にのびている。これは小さな田畠にこそふさわしい。設備投資はいらず、高齢者の体力で可能。技術は確立されている。農業に志を抱いている若者も増えている。残る課題は、農作物を食べる僕達自身の文化、生き方の問題ではないだろうか。ここはひとつ、土の中の生き物達の声に耳を傾けてみてはどうだろう。人間も自然の循環の一部に過ぎない。大気と土と水、その間に住む生き物全体に想いを馳せるところから、健康な土に依拠する古くて新しい農業が見えないか。

### 田舎の言い分

石原都知事の交付税制度の見直し発言に田舎からの的確な反論が見当たらないのがもどかしい。都市が稼いだお金を田舎が無駄遣いしているという議論は目新しいものではないが、メガポリスの知事の発言であってみれば、影響力を持つ。小さなコラムから都知事に反論したい。

昨年「ゆすはら国際スクール」で韓国の学生さん達と話す機会をいただいた。経済発展、過疎と過密、環境破壊、よくも悪くも確実に日本の後を追っている韓国である。若い人たちがこの倉の経験から学ぶことは意味があるだろう。僕が選んだテーマは、この国の農山村を守ることの意味についてであった。

都市が稼いだお金が田舎の経済を支えていることは一面的には事実だ。しかし、都市に空気や水、そして人材を供給してきたのは田舎である。都市の生活環境の機会をぎりぎりくい止めているのも田舎である。東京は田舎から切り離されでは一日も生きてはいけない。都市と田舎は対立ではなく対等の関係である。互いに支え合う関係である。梼原の、池川の、物部の山奥の小さな田畠一枚一枚がこの国を守っているのだ。

学生の後にじっと黙って座っていたおじいさんが深くうなづいてくださった。七十いくつ、今も現役で山の田園を守っておられる。田舎よ、胸を張ろう。

### 3) 大阪府セラピー農園普及推進事業

平成十一年大阪府若手職員を中心に研究会が開かれ、遊休農地の解消に寄与する方策のひとつとして「農」に「福祉」の視点を取り入れ、事業がスタートした。タテ割行政の枠を超える座長・山根寛 京都大学医療技術短期大学教授、医学博士を中心として農政に関わる行政関係者、福祉に関わる行政関係者、社会福祉法人関係者が集まり4年間検討された。行政枠を超えたとは言え、研究会スタート時は、互いに知らない用語と現状に大いにとまどった。しかし、それが効を奏した。私達は互いに自分の分野でもと思われるような事実や課題を、農政や福祉、医療についてシンプルに説明し合わなければならなかつたため、

かえって硬直し、パターン化した自らの思考を捨てて、違う視点で現実把握しようとした始め、問題や課題、そして可能性が次第に明らかになっていったのだ。

「農」の人間は「福祉」の現状の厳しい課題を聞きながら自分たちの持っている知識や行政機関の何が役に立つか考え、自ら服し現場に何度も足を運び、調査を繰り返し、時には、福祉の共同作業所の悩みにショックを受けた。こうした実践現場へ出向かっての調査・研究で次第にこの推進事業のカギは、この分野を開拓し支えることのできる人や組織のネットワークづくりであることがわかつってきた。その段階でこの事業は、平成十三年度より三年計画で大阪府花の文化園(植物園)と大阪府食とみどりの総合技術センターでの農産園芸福祉ボランティア養成講座へと発展した。

講座では、横のつながりをつくるために、市社会福祉協議会、消防局、福祉施設関係者が講師として、植物園と農業センターで福祉に関する実習中心の講義を行い、植物園、農林センターの府職員が、農業・園芸の知識をやはり実習中心の講義を行い、園芸療法研究会西日本(園芸療法の任意団体)と人と自然社が運営にあたった。ボランティアグループ、フルルガーデンサポートーズとKNACK(ナック)も生まれた。

講座をともに組み立てるプロセスの中で異分野の講師同志も互いに学びあい、そこから新たなネットワークも生まれた。果物栽培の細見研究員は、ぶどうや果物を車いす対応できるものや知的障害者にとって育てやすいマニュアル等を研究している。センターでは、センターの豊原研究員と生活工房という高齢者・身体障害者の在宅の生活環境の改善を専門職とする研究者増田が共同研究を手がけ始めている。

その増田氏に研究・開発内容を寄せていただいた。

「一方では高齢者の確実な増加は、余暇をより有効に使いたいと思いながらも身体的な衰え等から、なかなか園芸を楽しむことができない人が増えているであろうことは容易に想像できる。その中で植え床を上げ、土にふれやすい様にしたいわゆるレイズドベッドがいくつか商品化されている。しかし、その多くは車いす使用者が対象である。

しかし、実際の使用対象者の多くは自らは障害を持っていると自覚のない歩行や立位保持が不安定な高齢者である。

この間も、30人ほどのケアハウス在住者にいくつかのレイズドベッドを使用してもらう機会を得たが、園芸にかかることにより豊かさを得ることが確認できたことと同時に、立位に不安定な高齢者にとって、両手で土をさわり、植え込んでいく作業はかなり限定されることも確認された。しかも、そのような高齢者はある意味では大半を占めると言っても過言ではない。そのため、多くの高齢者が、使いやすいレイズドベッド、すなわちユニバーサルデザインのレイズドベッドを開発することにより、より豊かな生活に資することと考える。

使用場所は高齢者デイサービス、デイケア、グループホーム、各老人ホーム、病院、老健施設、各障害者施設、及び、個人宅等が対象となる。また、開発に当たっては、職員体制の充份ではない施設も使用対象場所と想定されるため、管理のしやすさも重要な点と考える。」

こうした広範なネットワークを可能にしたのは、園芸療法実践者である平山ユミ子・森愛・坂本 隆・永野 年雄・早川 和佳子・宮上 佳江らが何度も関連組織に出向き Face To Face で調整にあたった、粘り強い積極的なコーデネイトであった。

#### 4) 山口県園芸療法指導者養成課程

日本で最も高齢者、障害者に直結した人材養成をしているのが「園芸療法入門」の著者藤原 茂氏が長年の作業療法士育成の経験を生かして構築したこの課程はである。藤原氏は、ひげが妙に似合う人で口ぐせは「一人では何もできない。しかし、一人がはじめなければ何もはじまらない。」そう大声で、皆にはっぱかけながら「おう、いいとこに来てくれた。」と何かの縁で近づいた人達をまるで荷馬車に野菜を積めこむように乗っけて馬車馬のようにひた走りに走る。心臓が悪いのにひた走りに走って人と人を結び、園芸療法指導者養成課程（3年間コース）を作った。

在宅の高齢者や障害者をサポートする臨床バリバリの現場たたき上げなので、患者さんのニーズや苦しさを肌で知っており、講義はその現場での経験に裏付けられた、具体的なものばかりである。

このコースは即戦力となるよう、実体験を通して学ぶようになっている。園芸療法の園芸に関する学びは、農業高校の温室・畑・農業試験場で、高校教諭や農業試験場研究員・植物園職員が、それぞれの機関と知識や技術を提供した。療法に関する学びは藤原先生と作業療法や福祉の専門家がそれぞれ社会福祉のデイケアルームなどで行った。まるで旅芸人が様々な場所をめぐりながら、生きるようにこの受講生は、様々な所へ出かけ経験し、学んでいるのだ。在宅福祉の最前線を開拓した人ならではのダイナミックな現場主義の人材養成である。患者さんの必要のためならば、どこへでも出かけ、なんでもする力強い人材が育っている。

更に藤原氏はエコロジカルセラピー研究所の野村寿子氏らと共同研究しながら、五感に働きかける環境やおもちゃ・介護用品を開発している。患者さんのニーズを知り抜いている両者の共同研究開発の成果が次々と NPO 法人夢の湖村デイサービスで実現されている。今後ここで研究開発された成果は、日本のデイケアを活気のあるものと変えていくに違いない。

### 5 大学の研究者による新しい研究の動き

#### (1) 山口大学医学部

山口大学医学部保健学科、野垣宏医学博士は山口県農業試験場の内藤雅浩氏と刀祢茂弘との共同研究で、痴呆性高齢者に対する園芸療法の効果の検証をしている。医学部と農業試験場の共同研究は、筆者の知る限り全世界ではじめてであり、その研究はアメリカ園芸療法協会へ報告されている。野垣氏による研究の詳細を次のように寄稿して頂いた。

山口大学医学部保健学科 野垣 宏

山口県農業試験場

内藤雅浩

刀祢茂弘

近年、園芸療法は趣味の領域のみならず、福祉・医療の分野で幅広く応用されている。有効な治療法のないアルツハイマー病のような痴呆性疾患に対しては、特にその有効性が期待され、多くの施設・病院で試行錯誤が繰り返されている。経験的にはそれなりの効果が認められているが、残念ながら客観的な評価に関する報告はほとんどない。われわれは山口大学医学部と山口県農業試験場との共同研究として、グループホーム入所中の痴呆性高齢者に対する園芸療法の効果について定量的に検討している。2002年には、タッチパネルを用いた反応時間を測定し、園芸作業前に比べ作業後に反応時間の有意な短縮を認めた。

2003年においては、園芸品目や栽培手法別に効果を検証する。評価項目としては、ストレスに関する副腎ホルモンであるコルチゾールやクロモグラニンA、免疫グロブリンのIgAを測定し、それぞれ園芸作業前後で比較する。その結果から園芸療法がホルモン系や免疫系におよぼす影響を検討する。主観的・経験的ではなく客観的・定量的な評価の蓄積が園芸療法のさらなる発展に寄与するものと確信し、研究を進めている。

## (2) 島根医科大学

島根医科大学部看護学科の岡崎美智子教授を中心に、市民農園における園芸療法の実践研究にとり組んでいる。看護学の大学研究者が市民農園で実践研究するのも、筆者の知る限り全世界初である。その岡崎氏に寄稿して頂いた。

### 島根医科大学部看護学科「ケア研究会」の活動状況

研究会代表 岡崎美智子

ケア研究会の活動開始は、平成14年1月から今日まで2年に及ぶ短期間である。

研究会の目的は、園芸を看護学の領域に位置づけ、土に触れ、植物を育てて収穫したり、美しい花を咲かせる活動を通して、人々の心身を癒すことにある。

研究会のメンバーは、看護学研究者ら以外に地域の精神病院の看護師および理学療法士、地域の保健師、精神障害者作業所の指導員（保健師）ら10名である。

研究会発足のきっかけは、平成13年10月17日から3日間、カナダのホームウッド、ヘルスセンター園芸療法部に所属する元カナダ園芸療法協会会长のミッケル・ヒューソンおよび菅由美子先生を招聘し、特別講演を開催したことにある。その後、基礎看護学講座教授の岡崎が発案し、各看護学領域（精神看護学・地域看護学）の教官参加のもとに、特別講演に参加した方々にケア研究会の趣旨を説明した案内書を送り、その趣旨に賛同された前述のメンバーが参集し研究会が開催された。

研究会の主な活動は、年一回国外から菅由美子先生の支援を受け、アメリカ・カナダ園芸療法協会の著名な高等園芸療法士を講師に招聘し特別講演会および研究会を開催している。その機会を通して、園芸療法の基礎理念と考え方を学んでいる。さらに、月1回の定期例会でミッケル・ヒューソン著、菅由美子訳の「園芸療法実践入門」を抄読しながら意見交換をしている。その程度で、精神障害者の作業療法として園芸療法活動が有効であること、その有効性をより發揮できる効果的な関わり方と効果の判定となる評価について

学んだ。2年間の抄読み会は、メンバーのやる気を高め、どこか農園を借用して実践することの必要性を実感した。

研究会の新しい動きが始まった。メンバーが所属している精神病院内では、地域社会との交流が期待できないことから、メンバーである保健師のアイディアで、地域ボランティアの方の協力を得て、精神病院から30分の距離にある「ふれあい農園」で、地域の方とのふれあいを通して自然の中で精神障害者らが看護師の支援のもとに園芸療法を実践する試みが開始された。研究会のメンバーは、交代でふれあい農園へ参加し、精神障害者とともに時間を過ごしている。併せて、地域ボランティアの方から農園について学び、抄読み会での学びを再確認しながら新しい園芸を介したケアの方向性を模索している現状である。

### (3) 京都造形芸術大学 日本庭園研究センター

日本庭園は人と自然と時間の共同作品である。

尼崎 博正『庭石と水の由来』昭和堂

本センターは、日本で唯一の日本庭園に関する専門的かつ統合的な研究教育機関であり、スタッフは日本庭園の専門家はもちろんのこと、庭園設計、建築史、茶の湯文化、考古学、環境科学、園芸療法、庭師、石工など多彩な実務家で構成されている。

心と庭に関する研究のひとつとして、同センターは大学エクステンションセンター（生涯学習）と人と自然社と「人間性と創造」講座を主催し、芸術、自然、医療、福祉、教育を統合する実践総合科学、芸術のあり様をさぐっている。

同センター所長尼崎博正氏は日本園芸療法協議会の副会長をつとめる。また、同センターの研究員である寺田裕美子氏は心と庭研究会の代表をつとめ、6ヶ月のアメリカでの園芸療法研究をはじめ、みずのき（知的障害者施設）、京都太陽の家（身体障害者福祉場）等すでに5年以上もの日本人古来の自然観に根ざした園芸療法のあり方を研究している。

「日本庭園の専門研究機関の研究員が園芸療法の実践研究をするのは、世界初のこころみであり日本人の自然観に根ざした園芸療法の発展が多いに期待される。

また同大学の、「神戸の高齢者住環境の、コミュニケーション・スペースの追跡調査研究」をしている佐々木 葉二教授の研究も今後多いに注目されるであろう。

#### 障害者芸術との連動

園芸療法とも関連の深い障害者美術に関する研究も、同校の研究者とみずのき（知的障害者施設）との連携の下、進められている。小西 熙教授、博士課程研究中の金恵蓮さんが中心となり、2002年には大学でみずのきの絵画の作品展が行われました。

みずのきの絵画は国際的にも高い評価を得ており、スイス アールブリット美術館が6名の計十数点を保有している。金恵蓮さんはこの美術館を中心に、スイスの障害者美術の現状を把握するため、スイス国内の先駆的実践例を訪ね研究しており更に2003年秋にはアメリカ Melwood（ワシントンDC）を中心とする障害者芸術の研究のため渡米する。高齢者等のQOL（生活の質）の向上に大きく寄与するのであろう研究分野である。

#### (4) 京都文教大学心理臨床学部

秋田巌助教授（精神科医、ユング精神分析家）は平成9年より、筆者にユング心理学の可能性を示唆し、前スイス、ユング研究所所長、グウゲンビュール、クレイグ博士に師事することをすすめてくれた。筆者はそのため1999年より毎年冬の期間ユング研究所で十年計画で、ユング心理学と園芸療法のあり方を研究しており、その経過と概略を秋田氏に報告している。

ユング派心理療法と園芸療法に関する研究は端を発したばかりだが、豊かな可能性を含む研究分野である。将来、日本庭園等の研究者等がスイス、ユング研究所で、研究発表を行い、ユング研究所関係者が日本で研究発表すれば相方にとて実り豊かな研究が生まれるに違いない。

#### (5) 京都大学農学部

西村 和雄農学博士は有機農業認証協会の理事として活躍されておられ、30年に渡って有機農業に関わってきた。西村氏は、京都南区の保健所が精神衛生を目的に畠つくりしてきた動きを支援され、有機農業が精神衛生にいかに良いかということを実感してきた。「難しいことはいらん。裸足で畠で野菜をつくればいいのだ」と、大きな目をグリグリさせながら笑ったお人柄で、有機農業を誰にでも分かりやすくイラスト入りで説明される。今後の園芸療法と有機農業の連携が楽しみである。

#### (6) 兵庫県立淡路景観園芸学校

スピリチュアルサイエンスとしての園芸療法を、県立教育機関で実現する大役を果たしたのは、浅野房世教授である。SEN環境計画室として、公共の公園で、次々と高齢者、障害者にやさしい空間づくりを実現してきた人でもある浅野教授は、実現に向けて存在をはって果敢に県行政に提案し続け、アメリカ園芸療法協会認定高等園芸療法士としての、豊かなネットワークを生かして、県とアメリカ園芸療法協会をつなぐかけ橋となった。同校は少数精銳教育で15人の園芸療法分野で指導者たる人材を育成している。

#### (7) 東京農業大学

伊東 豊氏らが中心になり、園芸療法のための講座が生涯学習センターでおこなわれている。サンワみどり基金の助成を受け、園芸療法だけではなく体験型の環境にかんする講座など充実した内容を組み立てている。高齢者施設と連携してボランティア実践講座も行っている。卒業生である登坂ユカさんは茨城園芸療法研究会を主宰し、アメリカ長期研修も経て高齢者施設で活躍している。学生ボランティアも盛んで、今後の学生・受講生の活躍が期待される。

## 6 すぐれた実践例の特徴とその可能性

### (1) 新生会

日本の農村地域で欧米の先進事例を追い越す程の質の高い高齢者福祉を、開拓実現してきた強者がいる、群馬県榛名町、榛名山のふところにある、高齢者総合施設新生会である。

初代原正男氏は重症の肺結核をのりこえこの地に戦前に結核療養のサントリウムをつくった。その当時、県行政からは「手助けはしないかわりに口出しましない。」と言われたという。山間に位置していたため、困難続きであったが多くの人々が新生会を頼り住むようになり、現在、入居者、職員、出入りの地域業者を含め 1500 名ほどの福祉コミュニティが築き上げられている。

二代目理事長原慶子さんは、イギリス・オランダで長年福祉を学び、群馬の山間地で欧米並みの高い水準の福祉を実現してしまった。「からつ風とカカア天下」で有名な群馬の女性達がキビキビはつらつとして誇りをもってケアにあたる様子は、からつ風のように明るく気持ちが良い。

新生会は今年度より、イギリスで園芸療法の資格（Diploma in Therapeutic Horticulture）を取得した関口弘子さんを正式に雇用し、新生会の独自性にのっとった伸びやかな園芸療法めざし、本腰をいれた。彼女は、東北福祉大学を卒業後、自力でイギリスに渡り、ウォーリックシャーカレッジにて園芸を学び、その後 1 年間コヴェントリー大学にて園芸療法を学んだ。折しも、特別養護老人ホーム榛名憩の園の改築と地域住民のための「ヒューマン アート ライフ ケア コミュニティ センター」の建築プロジェクトが進んでいる。これから高齢者福祉のあり方を指し示しかつ園芸療法の要素も取り入れた屋上庭園を含めた建築プロジェクトが進められている。折しも、特別養護老人ホーム榛名憩の園の改築と地域住民のための「ヒューマン アート ライフ ケア コミュニティ センター」の建築プロジェクトが進んでいる。これから高齢者福祉のあり方を指し示しかつ園芸療法の要素も取り入れた屋上庭園を含めた建築プロジェクトが進められている。

新生会はすでに「福祉の芸術化」と屋上庭園の実現のビジョンを十数年も前から持ち続けており、過去十年間に数度にわたりイギリス庭園と福祉施設の視察研修を実施し建築プロジェクトに生かしてきた。二十年間に渡り、原建築設計事務所と高齢者「生き生きと創造的に年を重ねるため」の空間づくりを実現し、常に改善を繰り返してきた。新生会の住空間の質は、高齢者とケアする人々の生活の、細々したところまで配慮が行き届いている。

女性理事長ならではの斬新かつ大胆な発想は、暖かい柔らかいセンスと融合され住む人が自分らしく最期まで生きれる住空間を保障している。

新生会の実践は今後、日本の地域福祉の最もすぐれたモデルケースとして指針を与え続けるに違いない。

### (2) カナディアン・ファーム（長野県原村）

長野県の民家をとり壊す際の廃材等を活用して、設計図なしで、家をつくってしまう天才芸術家がいる。ハセヤンことは長谷川 豊さんである。ハセヤンは、来る者拒まずで、

国籍を問わず、頼ってきた若者を居そうろうとして受け入れ、共同生活しながら、有機野菜を育て、何も手作りのレストランを営んでいる。又総合学習を受けつけている。文部省が提唱する「生きる力」をつける教育というのは、まさしくハセヤンが全人格で実行している教育をいうのであろう。

NHK 教育テレビ、天才テレビ君で「基地づくりの名人」として3回登上し、今年度も好評に答えプロジェクトがある。又、今年度より子どもゆめ寄金等の助成を受け、エコ サイクル ワークショップ プロジェクトで子ども向けのワークキャンプが3回行われる。諏訪中央病院の庭つくりにも、人肌ぬいでくださった。

### (3) NPO たかつき（高齢者青空デイケア）— 大阪府高槻市

畠と手作りのあずま屋とプレハブハウスを拠点に、介護予防と生きがいの発見をめざし、介護保険サービスを受けていない比較的元気なお年寄りのための日帰りサービスを提供している。青空とわずかな土地があればデイケアが可能だということを証明している。近隣の高齢者施設や精神病院との連携も行っている。

### (4) 仲間の会作業所（名古屋市）

アルコール依存症の自助努力グループが運営する作業所で、市民農園を借りて園芸療法を行っている。三階のアパートの作業所の屋上には赤い羽根募金の助成による屋上庭園を作っている。今年度からは公園、公共機関の緑化スペースのメンテナンス等、自ら社会貢献することを通じて依存症から回復している。回復率が非常に高く、深刻化する社会問題の増加に対し、一条の光を投げかけている。

### (5) 畠の家（東京都町田市）

遊休農地を活用して、スタートされた精神障害者小規模作業所である。東京の心のオアシスとして保育園児から高齢者までの市民が気軽に訪れ、心のコミュニティを形成している。現在、農事法人と協力し、一万本のラベンダー等を植えている。

精神障害の人々の回復には目覚しいものがあり、メンバー数人がホームヘルパーの資格を取得し、社会貢献を目指すまで回復している。アメリカの先駆的モデルなどを障害者自身が訪れ、国際交流するため、渡米予定もある。慢性精神障害がここまで回復する例は、他に例がなく、（母なる自然）の持つ力と肝っ玉母さんの田丸弘子さんの底力に敬服してしまう。

### (6) 希望の家（栃木県鹿沼市）

栃木県農業試験場に勤務していた和久井 隆さんがそのレベルの高い知識と技術をもって知的障害者施設に転職して本格的な花卉栽培が実現した。

（花という重砲に、新たな価値観という花火を詰め込んで、知的障害をもった人達が町に繰り出したら、今よりもっと楽しい世の中になるのではないだろうか。）というファンタ

ジーを実現している。また、無農薬栽培を確立すべく、研究製品開発中である。さらに、近隣農家人手不足を解消すべく、知的障害者による担い手育成と新事業に乗り出している。県職員として農家を訪ねて回った経験を持つ人ならではの展開である。

#### (7) 山口農業高校・都立園芸高校・都立農産高校

農業高校の教員である浜田 恒生さん、豊田 正博さんなどの活躍は目覚しい。高校生を連れて老人ホーム・養護学校などに定期的に訪れ共に花を育てたりメンテナンスに汗したりしている。又、養護学校の生徒が農業高校の授業に参加するなど、今まで高校レベルの健常児と障害児の統合教育は難しいという常識を、くつがえす試みを実現している。

#### (8) グローバル園芸療法トレーニングセンター（熊本県益城町）

アメリカでは知的障害者がワシントン DC の農業庁などの官公庁緑化ゾーンのメンテナンスにあたる等、社会の日の当たる所で力いっぱい働いている。そしてアメリカの現状を一年半、現場研修した本田 洋志さんが日本で初めての園芸療法の NPO を設立した。

現在、精神障害・知的障害者が社会で働くチャンスを作り出している。又、コンサート等文化活動ができる庭を作っている。障害者の就労の分野での活躍が期待される。

#### (9) 和佐の里（和歌山県御坊市）

前カナダ園芸療法協会会长の下、園芸療法士の資格を取得した田崎 史江さんと、農業改良普及員の米倉 信治さん、そして医学的根拠の裏づけをおさえる医師、北手 俊一理事長のすばらしいネットワークで高齢者の園芸療法を確立している。日本で初めて居住空間に本格的園芸療法ガーデンを取り入れた老健施設である。社会福祉協議会の 200 万円の助成を受け、カナダのミッケルヒューソン氏を招き「人と自然—高齢者が楽しく生きていくための療法シンポジウム 2001」を開催するなど、後進の育成に尽くしている。漢方や中国医学を導入し、中国との国際交流も行っている。

#### (10) 日本海俱楽部(知的障害者施設/石川県能登半島内浦町)

知的障害者福祉の常識をくつがえすような快挙がある。海外青年協力隊員として活躍した国際感覚とネットワークを縦横無尽に使っている雄谷良成さんが中心に作ったヒーリングハイエリアである。能登半島の海外を見渡す町立ビアパークの隣接している丘にたてられた地ビールと多国籍料理のうまいレストランに行く。チェコの地ビール名人ステファンさんが、この能登に住んで地ビールつくり、ケハブー(トルコ料理)鳥の丸焼きエミューのスマートなど、珍しくて美味しい料理を目当てに人々が集まる。エミュー、オーストラリアのワラビー、ポートベリーなどの珍しい動物が幸せそうに走り回っている。

ふと気が付くとウエイターは知的障害者で、この地ビールは障害者が自信をもって瓶詰めしているのだ。楽しくておいしい、そしてめずらしい だから人が集まる。そんなところに知的障害者が自信を持って働いている。マイナー イズ ザ ベストを実感できる大自然に囲まれたヒーリ

ングベイエリアだ。アメリカの園芸療法を取り入れている施設と、障害者自身の国際交流を行い、姉妹施設提携している。

## 7 エピローグ 一 見えないものに価値をおく文化とシステムの構築をめざして 一

現代人は自分自身からも、仲間からも自然からも疎外されている。

エーリッヒ・フロム 「愛するということ」 紀伊國屋書店

人間の歴史は、ブレーキのないまま、自己破壊と自然破壊をせざるを得ない構造(システム)と文化の中でゴールが見えないまま強迫的に走り続けている。

物質や金に価値や幸福を置いてきた、現代日本資本主義社会のシステムや文化はいまや限界を迎えており。その限界や闇の中で、小さくかすかだが、輝いているものがある。病や障害を持つなどの厳しい現実を持ちつつも、限られた生を生きる意味や豊かさ、幸せ、楽しみを味わおうとして、生まれた園芸療法には、弱き者が弱いまま、豊かに、生きられる時間や場が、ありきたりの自然や生活の中で、種を蒔くといったささやかなことから実現できるという力強い普遍的な提案なのである。

### 対話とプロセス

私がこの稿で紹介している実践の現状は、『人から人へ働く微細で眼に見えない分子のような人の間の力の味方』(ウィリアム・ジェームス)を具体的に行っている勇気ある試みなのだ。誰もが、踏み出した時は不安で仕方なかったという。私はこれらの実践が、園芸・福祉・癒し・コミュニティといったキーワードを手がかりに、異なる立場の人々が『対話』という『プロセス』を通じて、長い時間をかけて徐々にかたちづくっているという事実に注目したい。園芸療法のマスターplanやモデルになったのではなく、目の前の農地や病気や施設の現状を直視しつつ、自然発生的に対話の中からヒントをつかみ、出会いから出会いをつなぎ、個々が今すぐできることから具体的に手をつけた集積なのである。行政指導でない現場主动の努力なのだ。

これは子育てに似て「混沌」カオスの連続であり、近代科学では非科学的・非論理的だと馬鹿にされるようなアプローチであるが、子育てがそうであるように、実際の人間の命や生活を支えているのは、このような実感の伴った総合的思考と具体的で細々とした手当て(ケア)なのだ。これらは、あまりに個別のアプローチで画一化できないため、科学的根拠や普遍性のないものとみなされてきた。

しかし、例えば山間農地というマイナーの場で、少数派である障害や病という課題に直接、実践レベルでアプローチする際、マイナーな要素が集まった現実を、大多数に応用しようとする画一的手法や従来の科学的アプローチは切り捨ててしまう。

### 生活の中で探求される全人格的な実践総合科学・芸術

今、私達は、人間や自然を多面的で日々変わる生きた現実として、全人格的に、又全自然的に生活レベルでアプローチする総合実践科学を生み出したい。しかも科学すること

がすなわち日常生活の中で創造するプロセスとなり得る総合実践科学・芸術を、当たり前の生活という場で、大胆に試みたい。そして、この科学は、個人や特定の地域の独自性という土台の上に築かれるであろう。そして「対話と実行のプロセス」自身がこの科学と芸術の研究方法なのだ。

### 経済的困難や限界を乗り越えてきた実践例

この稿で紹介した実践研究のほとんどが数百万円以内の年間予算で実施されてきたことにも注目したい。経済的困難のためにこれらの研究や実践が何度も座礁しかけ、スタッフの何人かは激務と不安のために身体を壊し、断念せねばならぬような状況に追い込まれることさえあった。

人や組織のネットワーク化がいつも平穏に前向きに進んだわけでは決してなく、何か魂胆があるのではないかと互いに疑うような時期を通過することも多かった。にもかかわらず、これらの実践研究は誰かが力を落とすと他の者がかわりに荷い、見えない人間のつながりの支えの中で継続してきた。座礁し、立ち消えになってしまふおかしくない試みばかりだった。しかし、確かな手応えと実感が、関わる人々を前へ前へと一歩ずつ進めた。振り返ると、経済的困難は、建前を言う余裕を、私達に与えてはくれなかった。だから本音と本音がぶつかりあう中で、実践現場はつくられたのだ。耕し蒔けば芽が出、草むしりし、水やりをして収穫という、私達の力量不足とはおかまいなしにドンドン育つ植物と人々のおかげで、私達は必要最小限で最も重要なことをとにかくこなす力をつけた。してもしなくてもすむことをしている余裕など、どこにもなかったからである。

こうした限界や厳しさの中をくぐり抜けてきた実践例ばかりをここで紹介した。そのほとんどが；僅かな人数からスタートされた小さな試みであることにも注目したい。しかし種や小さなつぼみがすべての要素を最初から持っているように、これらの実践例には園芸療法が成立するすべての要素が凝集されており、人と自然の有機的な循環をつくり出している。

こうした現場主義の真摯な独自性の高い実践研究を、ひとつひとつ拾い上げ育てる、政策の実現を心待ちにしている。